過去にならない

中沢　央

仕事終わりに同期と飲む酒は、格別においしい。しかも、明日は休日となると、解放感と高揚感もついてくる。

「そーいえばさー。最近祖母ちゃんがボケてきてるみたいなんだよね」

「え」

私はグラスを置いた。

どうしよう。陳腐な言葉しか思いつかない。でも、大変だということと、同期が話を聞いてほしいと思っていることは、想像しなくても分かる。

「大変だね」

「うん。母さんたちが面倒みているらしいんだけどさ。『子供の頃自分をいじめていた人たが、またいじめに来る』って騒いで大変なんだって」

今度こそ、私は言葉を失った。周囲のざわめきが、嘘のように聞こえなくなっていった。

私が大学を卒業して、社会人になって五年も経たない頃だ。高校時代の友人が亡くなった。自ら命を絶ったこと、友人が中学生のときまでいじめられていたこと、「またいじめられたらと思うと、恐怖で生きていけない」といった旨の遺書が残されていたことを、噂で聞いた。

友人とは高校のとき知り合ったかが、その時の友人はとても明るい子だった。まさか、いじめに遭ったことがあるなんて、思いもしなかった。

友人が亡くなった原因を聞いた時は、何で数年も経ってから、と思った。もう過去のことなのに。

「――ねえ、ちょっと大丈夫？」

同期の声で、我に返った。

「――あ、ごめん」

「顔色悪いよ。ごめん、急に重い話して」

「ううん。大丈夫だよ」

しかし、同期はそれ以上祖母のことを話すことはなく、その後は他愛ない話をして、解散になった。

同期には悪いことをした。あの子も、悩みを打ち明けたかっただろうに。今度、改めて食事にでも誘おう。

私は、空を見上げた。今日は曇りなのか、星はほとんど見えなかった。

あの友人は、今は幸せだろうか。あの世なんて信じてないけど、向こうの世界では、もう苦しまずに過ごせているのかな。過去のことになることのない、不安と恐怖を抱えることなく、過ごせているかな。